

全ての生徒が安心して学校生活を送ることができる学校を目指して

—不登校の未然防止、早期発見・早期対応に向けた教員の取組—

専門支援部教育相談課 長期研修員 山本 仁子

1 主題設定の理由

文部科学省(2019)が報告した平成30年度の高等学校における不登校生徒数は、52,723人(前年度49,643人)、在籍者に占める割合は1.63%(前年度1.51%)で増加傾向にある。また、不登校生徒のうち中途退学に至った生徒は13,387人(25.4%)、原級留置となった生徒は3,651人(6.9%)おり、指導の結果、登校する、又はできるようになった生徒は20,595人(39.1%)であった。文部科学省は「児童生徒が不登校となる要因や直接的なきっかけは様々であり、また、不登校状態が継続すれば、時間の経過とともに不登校の要因は変化し、また、学習の遅れや生活リズムの乱れなどの要因も加わることで解消の困難度が増し、ますます学校に復帰しづらくなる」と指摘している。

一方、不登校問題に関する調査研究協議会による「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」(2003)では、生徒が不登校にならない、魅力ある学校づくりを目指すことの重要性を示し、全ての生徒にとって、学校は安心感・充実感が得られる活動の場であることが重要であると述べている。

所属校においても、不登校や欠席日数が多い生徒が在籍するクラスが複数ある。その中でも、特に1年生に多くみられる。新たな環境で希望を抱きスタートさせた高校生活の中で、様々な理由から登校できない状況となり、苦しい思いをしている生徒もいる。そして、教員はその対応に苦慮している。私自身も、不登校生徒と関わったこれまでを振り返ると、「あの時のあの発言は不登校の予兆だったのか」「もう少し早い時期に、違った対応をすれば学校生活を続けられたのだろうか」など、自身の対応に対して後悔の念に駆られる苦い経験がある。日々の教育活動の中で、不登校を未然に防止できるよう、早期発見・早期対応につながる教員一人一人の取組やチーム支援体制の重要性を強く感じていた。

そこで、本研究では、新たな高校生活で自身の居場所や人間関係に不安を抱え、不登校生徒数の割合が一番多い1年生を対象に、不登校の未然防止につながる、早期発見・早期対応のための効果的な取組や支援体制について追究することとした。そのことによって、全ての生徒が不登校にならず、安心して学校生活を送ることができる学校の実現を目指すことができるのではないかと考えた。

2 研究の目的

高等学校1年生において、不登校の未然防止につながる早期発見・早期対応のための効果的な取組や支援体制について考え、実践する。その後、その効果について検証し、全ての生徒が安心して学校生活を送ることができるようにするための支援の在り方や具体的な取組について提案する。

3 研究の方法

研究は、研究協力校 1 年生 196 人と指導する教員 11 人を対象とし、次の方法で行った。

- (1) 1 年生徒・全教員を対象に事前調査を実施し、学校生活に関する実態や課題、学校生活に不安を抱えている生徒を把握する。
- (2) 個々の教員及びチーム支援体制による効果的な支援を考え、実践する。
 - ア 研究に対する共通理解を図る校内研修の実施
 - イ 早期発見・早期対応のための取組とその効果
 - (ア) 健康調査項目の見直し
 - (イ) 信頼関係を深める肯定的な言葉掛け
 - (ウ) 生徒に寄り添う教育相談
 - (エ) 「教育相談だより」の発行
 - (オ) 学習の悩みを解決する個別指導
 - (カ) 持続可能なチーム支援会議
- (3) 1 年生徒・1 年部の教員を対象とした事後調査を実施し、事前調査結果との比較や生徒・教員への聞き取りを基に、実践効果を検証し、効果的な取組について提案する。

4 研究の内容

(1) 学校生活に関する実態や課題、及び特別な支援を必要とする生徒の把握(5月27日実施)

1 年生の全生徒を対象に、授業、クラス、部活、先生、学校生活について、事前調査「安心して学校生活を送るために」を実施し、生徒の学校生活における現状を把握した(表1)。また、教員にも同義の項目で事前調査を実施し、教員の実態や生徒の実態とのずれについて調べた(表2～表6)。

ア 生徒の「授業」に関する実態

項目1・2の肯定群の割合が両項目ともに80%を超えていることから、生徒は概ね授業内容を理解していることがうかがえた。しかし、項目1では80%の肯定群のうち、「4」「5」の生徒が73%であり、否定群も20%あることから、授業内容の理解に確かな自信はもてていない状況もうかがえた。項目3では否定群の割合が46%、項目4でも40%の生徒が否定群であることから、授業内容の確かな理解を図るためには、生徒が意見を言いやすい授業づくりや意図的に授業内容の理解を助ける機会を設けていくことが効果的と考えた。

イ 生徒の「クラス」に関する実態

項目5の肯定群の割合は96%、そのうち「6」を選択した生徒が75%を占めていることから、概ね「クラス内に話ができる友人がいる」ことがうかがえた。しかし、クラス内の人間関係づくりに特別な支援と配慮が必要と考える否定群の生徒が4%いることも分かった。項目6では、肯定群の割合が66%と他の項目に比べやや低い傾向にあり、よさを発揮する機会がないと考える否定群の生徒が34%いることも分

かった。項目7では、肯定群の割合が77%と高いが、否定群と肯定群の境界である「3」「4」の回答が49%、否定群が23%を占めており、取組への自信のなさもうかがえた。

教員は、学級内の生徒の人間関係に配慮するだけでなく、生徒によさを伝えたり、よさを発揮できる場を設定したりするとともに、生徒が目標を達成できるようキャリア教育などを通じて生徒を支援していく体制が必要と考えた。

ウ 生徒の「部活動」に関する実態

項目8では、肯定群の割合が92%あり、そのうち「6」を選択した生徒が57%を占めている。部活動が、多くの生徒の充実した高校生活につながっている様子がうかがえた。項目9では、87%の生徒が肯定群を選択しているが、否定群13%(23名)の生徒は人間関係に問題を抱えていることが分かった。項目8の否定群8%(16名)の生徒も含め、今後、担任と部活動顧問との連携した支援が効果的と考えた。

エ 生徒の「先生」に関する実態

先生に関する10～12の項目では、いずれも肯定群の割合は50%を超えているが、他の項目に比べると低い傾向にあった。また、「6」を選択した生徒は10%程度に留まり、否定群と肯定群の境界である「3」「4」の回答に60%近くが集中し、「1」「2」の回答も15%近くあった。「1」を選択している生徒のうち7名は、「先生について」の全ての項目に「1」を選択しており、残りの生徒も、先生に対する否定的な回答が目立った。

表1 生徒の「安心して学校生活を送るために」事前調査結果

			(%)					
			否定群			肯定群		
			← 全く当てはまらない			よく当てはまる →		
	No.	項目	選択段階					
			1	2	3	4	5	6
授業	1	授業内容が理解できている	1	4	15	46	27	7
	2	出されている宿題は自分で取り組んでいる	1	3	12	29	32	23
	3	授業中、自分の意見が言いやすい雰囲気がある	5	10	31	31	19	4
	4	授業内容がわからない時、先生は個別の指導をしてくれる	5	8	27	34	20	6
クラス	5	クラス内に話ができる友人がいる	0	1	3	8	13	75
	6	クラスの中で、自分のよさを発揮できる場面がある	6	5	23	28	21	17
	7	自分の目標に向かって努力することができている	4	2	17	32	26	19
部活	8	楽しく活動できている	1	3	4	14	21	57
	9	部活内の人間関係は問題ない	2	4	7	17	19	51
先生	10	学校には、日頃から自分に声を掛けてくれる先生がいる	7	7	25	35	14	12
	11	学校には、自分のよさや頑張りを認めてくれる先生がいる	4	8	20	41	16	11
	12	学校には、安心して相談できる先生がいる	10	9	25	31	14	11
学校生活	13	あなたにとって学校は安心して生活できる場となっている	4	5	15	31	26	19
	14	学校に行きたくないと思ったことがある	25	15	16	16	13	15

教員は、生徒との関係をさらに深めるために、生徒を認める言葉掛けを継続的に行うとともに、教員の言葉が生徒に確かに受け止められるよう、日常的な生徒との信頼関係づくりに努める必要があると考えた。

オ 生徒の「学校生活」に関する実態

項目 13 では、約 80%の生徒が肯定的な回答をしたが、そのうち「6」を選択した生徒は 19%であった。項目 14 では、学校に行きたくないと思ったことがあると肯定的な回答をした生徒が 44%あった。その理由の多くは、通学に対する大変さであったが、人間関係の不安を訴える回答もあった。今後一人一人の生徒がさらに安心して学校生活を送ることができるような指導・支援が必要であり、特に学校生活が「安心できる場でない」かつ「学校に行きたくない」生徒7名については、他の生徒以上に注意深く観察するとともに、丁寧な支援が必要と考えた。

カ 教員の回答と生徒の回答との比較

教員の項目 1～4 はいずれも肯定群の割合が 80%を超えているが、「4」「5」の割合が高いことから、確実な実践とは言い切れないことがうかがえた。また、項目 3 の肯定群の割合が、教員 83%に対し、生徒は 54%、項目 4 では、教員 94%に対し、生徒は 60%という結果から、教員の意識的な指導を生徒に確実に届けるためには、一層の工夫や改善が必要であると考えた。

そこで、授業内外において授業内容の理解を助ける機会を設けることや互いの異なる意見を尊重し学びを深める学習環境を整えること、理解が不十分な生徒に対し担任と教科担当が連携した支援をすることが有効ではないかと考えた。

表 2 「授業」に関する比較 (%)

	No.	項目	選択段階	否定群			肯定群		
				1	2	3	4	5	6
授業	1	授業内容が理解できている	生徒	1	4	15	46	27	7
		個の理解度に応じた指導をしている	教員	0	0	11	63	20	6
	2	出されている宿題は、自分で取り組んでいる	生徒	1	3	12	29	32	23
		生徒が自分で取り組めるような課題を提示している	教員	0	0	6	45	40	9
	3	授業中、自分の意見が言いやすい雰囲気がある	生徒	5	10	31	31	19	4
		生徒が授業中に意見が言いやすい教室環境になるよう努めている	教員	0	0	17	48	26	9
	4	授業内容がわからない時、先生は個別の指導してくれる	生徒	5	8	27	34	20	6
		生徒が気軽に質問できるような声掛けを心掛けている	教員	0	3	3	54	31	9

項目 5～7 では、教員の回答が「3」「4」「5」に集中し、生徒の回答とのずれも大きかった。教員は生徒の人間関係やよさを丁寧に把握し、生徒が目標に向かって更に努力できるよう、確かな支援をすることが必要と考えた。

表3 「クラス」に関する比較 (%)

	No.	項目	選択段階	否定群			肯定群		
				1	2	3	4	5	6
クラス	5	クラス内に話ができる友人がいる	生徒	0	1	3	8	13	75
		クラス内に、話のできる友人がいない生徒を把握している	教員	0	3	17	50	23	7
	6	クラスの中で、自分のよさを発揮できる場面がある	生徒	6	5	23	28	21	17
		生徒のよさを発揮できる場面（係・委員など）を設定している	教員	0	10	36	27	17	10
	7	自分の目標に向かって努力することができている	生徒	4	2	17	32	26	19
		生徒が目標に向かって努力できるよう支援している	教員	0	0	10	60	23	7

教員の項目8、9も、「6」と回答した割合が低く、「3」「4」「5」に集中していることから、教員が部活動における生徒の様子を把握しきれていない現状があることがうかがえた。

教員は、問題を抱える生徒の把握に努め、部活動顧問などと連携してより適切に支援していくことが必要と考えた。

表4 「部活」に関する比較 (%)

	No.	項目	選択段階	否定群			肯定群		
				1	2	3	4	5	6
部活	8	楽しく活動できている	生徒	1	3	4	14	21	57
		部員の活動の様子を把握している	教員	0	0	19	31	34	16
	9	部活内の人間関係は問題ない	生徒	2	4	7	17	19	51
		部員同士の人間関係を把握している	教員	0	0	22	35	34	9

項目10～12については、生徒と教員とを単純に比較できるわけではないが、教員は全ての項目に対し回答の97%が肯定群で、「1」「2」の回答は見られなかった。一方、生徒はどの項目においても「1」「2」の回答が数名ずつおり、否定群も10%～40%あった。教員の実践意識と生徒の回答とのずれが大きいうかがえた。

生徒との信頼関係をさらに深めるために、教員はこれまで以上に生徒に届く関わりを、チームで続けていく必要があると考えた。

表5 「先生」に関する比較 (%)

	No.	項目	選択段階	否定群			肯定群		
				1	2	3	4	5	6
先生	10	学校には、日頃から自分に声を掛けてくれる先生がいる	生徒	2	4	7	17	19	51
		生徒が気軽に声を掛けられるように、生徒と接している	教員	0	0	3	50	32	15
	11	学校には、自分のよさや頑張りを認めてくれる先生がいる	生徒	4	8	20	41	16	11
		生徒のよさや頑張りを認める言葉掛けをしている	教員	0	0	3	38	44	15
	12	学校には、安心して相談できる先生がいる	生徒	10	9	25	31	14	11
		生徒からの相談は傾聴したうえで、一緒に考えている	教員	0	0	3	38	44	15

項目 13 についても生徒の回答と教員の回答とにずれがみられた。教員は、「1」「2」と回答した生徒を中心に、その実態を把握し、適切な支援につなげる必要があると考えた。

表 6 「学校生活」に関する比較 (%)

学校生活	No.	項目	選択段階	否定群			肯定群		
				1	2	3	4	5	6
13	あなたにとって学校は安心して生活できる場となっている	生徒	生徒	4	5	15	31	26	19
			教員	0	0	24	58	15	3

(2) 研究実践

事前調査結果から「全ての生徒が安心して学校生活を送ることができる学校」を実現するためには、教員一人一人が、生徒との信頼関係をさらに深め、生徒一人一人に届く支援をしていくことが必要と考え、次のような取組を行った。

ア 研究に対する共通理解を図る校内研修の実施

本研究への理解を図り、教員の観察力やチーム支援に対する意識を高めるために、県総合教育センターから講師を招き、「不登校を「未然防止」「早期発見・早期対応」するために～研修ワークシートを活用して～」というテーマで、校内研修を行った（図 1）。



図 1 校内研修の様子

研修後、教員から「担任一人で対応するのではなく、学年部等チームで対応することの大切さを感じ、実践していかななくてはならないと思った」「生徒観察のこれまで気付かなかった視点をいくつもいただいた」という言葉が聞かれた。また、研修後の調査では、多くの教員が「観察力を高めることができた」「チーム支援の必要性を感じた」と回答した。

イ 早期発見・早期対応のための取組とその効果

(7) 健康調査項目の見直し

担任が生徒一人一人の変容に早期に気付くことができるよう、日々行っている健康調査様式（図 2）に、「表情がすぐれない」「落ち着きがない」「顔を伏せている」「いつもと様子が違う」「その他」の 5 つのチェック項目を追加した（図 2 ①）。併せて、養護教諭からの情報を担任と共有することによって、生徒への的確な声掛けにつなげるため、養護教諭の立場から教育相談が必要であると感じ

HRNO	氏名	5月10日	5月11日	記入例	
		★尿検査	PTA総会	体に現れるサイン	
1101				風邪	カ
1102				頭痛	ズ
1103				腹痛	フ
1104				咳	セ
1105				鼻水	ハ
1106				気持ち悪い	キ
1107				その他	〇〇〇
1108				欠席	欠(〇〇)
1109				遅刻	遅(〇〇)
1110				早退	早(〇〇)
1111				欠席・遅刻・早退は理由記入	
1112				行動や態度に現れるサイン	
1113				表情がすぐれない	A
1114				落ち着きがない	B
1115				顔を伏せている	C
1116				いつもと様子が違う	D
1117				その他	〇〇〇
1118				保健室より	
1120				来室あり	来室時間と理由
1121				要教育相談	★
1122					
1123					

図 2 健康観察記録用紙

ている生徒をチェックする欄も、新たに設けた(図2②)。担任が生徒の様子を健康観察記録用紙に記入することによって、養護教諭は生徒が保健室に来室した際、生徒に的確な声掛けができ、円滑なコミュニケーションにつなげることができた。また、養護教諭がその様子健康観察記録用紙を通じて担任に伝えることによって、教員間の連携が円滑になることも分かった。

(4) 信頼関係を深める肯定的な言葉掛け

教員の実践意識と生徒の実感とのずれが一番大きく見られた「言葉掛け」によって信頼関係を深めるために、教員は、学校生活のあらゆる場面で、日頃から積極的に生徒一人一人への肯定的な言葉掛けを心掛けた。実践する中で、部活動で悩みを抱えていた生徒が、「自分で決めないと」という教師に掛けられた言葉で、気持ちを後押しされ、学校生活を前向きに過ごすことができるようになった姿や、授業中、「よく分かっているね」と教師に認められたことが自信となり、さらなるやる気につながった生徒の姿などが見られた。

表7に、生徒への調査に記されていた「生徒の心に残った先生の言葉」をまとめた。

表7 生徒の心に残った先生の言葉

受容	<p>「大丈夫？何でも言って」「何か嫌なことがあったら相談しろよ」 「困った事があれば相談に乗るぞ」「今日寝ていたけど何かあった？」 「体調崩しちゃったか？」「また困ったら話聴くからおいで」 「悩んだら何でも言いな」 *廊下などで会釈したときに笑い掛けてくれた表情や、挨拶をした時、返してくれた挨拶 *自分の意見をたくさん肯定して話を聞いてくれた</p>
承認	<p>「今までたくさん練習してきたから大丈夫だよ。自信をもって」 「もっとこうしていけば大丈夫」「自信を持ってばいいよ」「いいよ。できてるよ」 「特進クラスに行っても大丈夫」「頑張ったね」「(授業内で)よく分かっているね」 「いい動きができていよ」「いつもありがとう」「すごかった」 *テストの点数を褒められた *部活動でその動きを褒められたりした</p>
励まし	<p>「一人一人捉え方が違うから、気にしなくていいよ」「期待してるぞ」 「まずはこっちから」「今は無理でも来年チャレンジすればいい、精一杯やればいい」 「あなたは一人じゃない」「(毎日)大丈夫かい？」「やればできる」 「頑張れば頑張った分だけ努力は実るから」「頑張れ」「頑張ってる」 「よく頑張ってるじゃん。これからも頑張れよ」 「(部活で悩んでいた時) 苦しかったらいいんだよ」 「いつも通り落ち着いてやればいいよ。上手くいかなくても、次や来年があるから」 *高校生活が始まって不安だった自分を先生方は支えてくれ、温かい言葉を掛けてくれた *先生の体験談(陸上の話) *声や性格、頑張りを評価してくれた言葉 *足のけがのことを心配してくださったり、声を掛けてもらった時の言葉</p>
助言	<p>「(勉強は)求められるけど、みんながみんな勉強できなきゃいけないわけじゃない。他の得意なこともあるはず」「自分で決めないと」「緊張を楽しめ」 「(部活動で)やり投げはこうするといいぞー！」 「自分のやりたい道を切り開いて、そこから夢を増やせばいい」 「人間関係で問題がある時は、辛くてもその人に寄り添わないと変わっていかない」 *自分の過去を話して、アドバイスをもらった *問題の解き方などを教えてくれた *部活動で作品を仕上げている時に、親身になって作品のアドバイスや長所を教えてくださった</p>

(ウ) 生徒に寄り添う教育相談

日常生活での相談をはじめ、面接週間や三者面談では、教員は生徒の話を傾聴し、思いや悩みを一緒に考えていくという姿勢で臨んだ。

事前調査で項目「学校は安心できる場所」において、どちらかという当てはまらない「3」と回答した生徒Aは、人見知りな性格もあり、入学当初は友人関係の構築に苦労していた。担任や部活動顧問は生徒の様子を気に掛け、熱心に声を掛け続けた。担任は、生徒がクラスの専門委員として活躍する姿を認めたり、部活動では顧問が、高校生で新たに始めたスポーツでの頑張りを評価したりした。このような学校生活の様々な場面での言葉掛けにより、生徒と教員との人間関係は深まり、生徒Aは、事後調査の項目「学校は安心できる場所」に「6」と回答した。

(エ) 「教育相談だより」の発行

事前調査で、生徒同士の間人間関係が構築されず、相談できる先生もいない生徒が確認されたことから、生徒自身が必要に応じて不登校を回避できる手段をもつことが有効と考え、「教育相談だより」を発刊した(図3)。第1号では、スクールカウンセラー(以下「SC」という。)の来校情報や活用方法などを発信することによって、校内にも安心して相談できる場があることを知らせた。第4号では、SCと面談した生徒の感想を紹介することによって、気軽に援助要請を出せば、相談にのってくれる人が校内

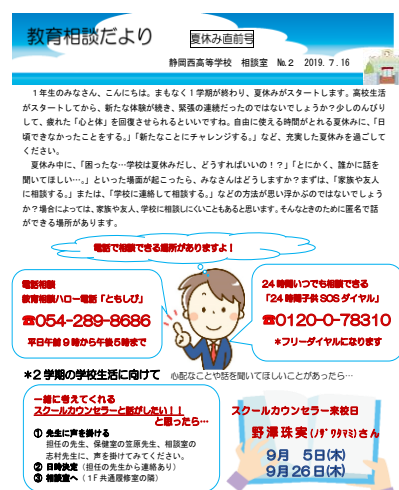


図3 「教育相談だより」第2号

にいることを知らせた。長期休業前には、相談機関の紹介として、電話での相談「教育相談ハロー電話「ともしび」」、「24時間子供SOSダイヤル」、県が行っている「LINE相談」も紹介した。また、学習での困難さを解消するための情報として、校内の個別学習支援の紹介や開催日時、場所などの必要な情報も提供した。

発刊を続けていくと、自らSCの予約を申し出る生徒も見られるようになった。面談を受けた生徒は「たくさん話を聞いてもらったので、気持ちが楽になった」「また話がしたい」と話し、不安でいっぱいになった気持ちを、SCに吐き出すことによって、気持ちに余裕が生まれ、また前向きに学校生活を送ることができるといった好循環につながった事例も見られた。

(オ) 学習の悩みを解決する個別指導

生徒の学習の悩みを解決するために、「教育相談だより」を通じて、学校が実施している学習フォローの取組を生徒に伝えた。個別指導を受講した生徒の多くは「先生が1から教えてくれ、授業より分かりやすかった。点数と順位が上がった」「とても細かく分かりやすく指導して下さった」「1対1で教えてもらったの

で、分からなかった所ができるようになった」「分からないところなどを分かるまで教えてくれた」と肯定的な感想を述べた。しかし、生徒の多くは個別指導を利用していない現状も分かった。その理由として、「個別指導が実施されていることを把握していない」が最も多く、次に、「部活動や委員会活動と重なり利用する時間がなかった」が挙げられた。今後、生徒への周知徹底を図るための方策として、掲示物を工夫することや生徒が学習を最優先できるような学習環境づくりに努める必要があると考えた。

(カ) 持続可能なチーム支援会議

未然防止の観点で持続可能なチーム支援会議をどのように開催すべきか所属校の相談室長と検討した結果、学年会議と同日に、学年部の全ての先生を対象とし実施することとした。対象とする生徒は、各担任がチーム支援を必要とする生徒を学年主任に報告し、学年主任が検討する生徒を決定する。会議では、教員・生徒それぞれが抱える問題の共有や、教員一人一人の支援方法を検討し、その後の支援につなげる。次回のチーム支援会議では、生徒の変容を確認し、必要に応じて支援策の見直しを行っていくこととした。

クラス内での孤立が心配される生徒Bについて話し合ったチーム支援会議では、生徒Bは、自身から援助要請を出さないため、生徒Bに関わる全ての教員が意識して観察すること、また、相談担当の教員が担任とは違う立場で教育相談を行い、生徒が気持ちを吐き出す場を設けることを決めた。支援を続けるうち、進路に明確な希望を持った生徒Bは、進路実現に向けて努力するようになった。現在、生徒Bは学校を欠席することなく登校している。

(3) 実践効果の検証、及び効果が期待される取組

約6か月の実践後、事後調査を実施し、事前・事後調査結果の比較や生徒と教員からの聞き取りを基に、効果の検証を行った。

ア 生徒の「学校は安心して生活できる場になっているか」の変容とその要因

「4月当初と比較して学校は安心して生活できる場になっているか」の項目において、生徒の80%が肯定的な回答をした。

肯定的な回答となった主な要因は、「クラス内の友達ができ」「通学に慣れた」「部活動での人間関係ができ」であった(表8)。高等学校1年生にとって、学校が安心して生活できる場となるためには、人間関係の構築や通学の慣れが大きな要因であったこ

表8 肯定的な回答をした生徒の安心につながった要因

主な要因	%
クラス内の友達ができ	82
通学に慣れた	60
部活動での人間関係ができ	58
クラスで自分の意見が言いやすい雰囲気ができ	22
クラス内で自分のよさを発揮できる場面がある	21
学校生活の中で自分のよさを発揮できる場面がある	19
先生からの声掛けがある	18
授業中自分の意見が言いやすい雰囲気ができ	15
先生が自分のよさを認めてくれる	15
相談できる先生ができ	15
学習での個別支援(静西オフィス・アワーなど)が受けられる	4
相談室だよりなど、困った時役立つ情報がある	4
その他	1

とが改めて分かった。また、クラス内に「自分の意見が言いやすい雰囲気がある」「先生からの声掛けがある」など、クラス内の居場所や先生との関わりが実感できたことも主な要因であったことも分かった。

一方、否定的な回答をした生徒の「学校が安心できる場とならない」要因を探るため、肯定群・否定群それぞれの安心して生活できる場となるための要因別重要度（表9ア①～⑦）と、その要因別実感度（表9イ①～⑦）とを比較した。

表9 安心して生活できる場となるための要因別重要度及び実感度

＜ア 重要度＞							＜イ 実感度＞								
①		学校は安心して生活できる (%)						①		学校は安心して生活できる (%)					
		否定群			肯定群					否定群			肯定群		
要因	評価	1	2	3	4	5	6	要因	評価	1	2	3	4	5	6
授業で自分の意見が 言いやすい雰囲気	1	1		1		1		授業で自分の意見が 言いやすい雰囲気	1	3	3	2	3	1	
	2	1			1				2		2	4	9	1	1
	3		1	1	2	1	1		3	1	3	11	15	15	11
	4	1	3	6	12	11	4		4	2	1	6	25	27	8
	5	1	1	3	8	7	7		5	5	5	10	20	9	9
	6	1		2	9	5	7		6	3	1	6			
		84%			94%					24%			63%		
友人が クラス内に話ができる	1							友人が クラス内に話ができる	1	1	1				
	2								2			1			
	3		1	1	1	1			3	1					
	4	1	2	3	5	3			4	1	1	1	6	1	
	5	1	1	4	1	6	2		5	8	4	6	10	3	1
	6	2	2	5	16	20	16		6	2	2	6	20	21	18
		95%			99%					89%			100%		
クラスで自分のよさを 発揮できる場面がある	1			1	1			クラスで自分のよさを 発揮できる場面がある	1	1	2	1	1		
	2	1		1		1			2	1	1	1		1	
	3			2	5	1			3		1	5	9	5	1
	4	2	4	6	11	8	2		4	1	1	4	11	11	4
	5	2	2	2	7	11	5		5	7	2	2	11	11	5
	6	1		1	7	4	11		6	1	1	1	4	4	9
		82%			88%					74%			80%		
学習での個別支援の 機会がある	1	1	1		1	1		学習での個別支援の 機会がある	1	1	1	1			
	2		1		1	1	2		2	1	1	2		1	1
	3		1	3	3	3			3	1	1	4	7	4	2
	4	2	2	7	14	10	7		4	1	1	4	16	11	5
	5	2	2	2	7	12	6		5	5	2	2	11	11	5
	6	1		1	6	4	4		6	1	1		1	2	6
		71%			81%					53%			82%		
日常的に先生が 掛ける声がある	1	1			1		1	日常的に先生が 掛ける声がある	1	2	1	1	2		
	2		1			1	1		2		2	1	1	1	
	3			2	6	3			3	1	1	4	8	4	1
	4	1	3	4	13	10	3		4	2	5	4	14	11	4
	5	1	1	6	7	7	5		5	5	2	2	11	11	4
	6	1		1	5	3	9		6	1			3	2	10
		84%			85%					24%			80%		

⑥		学校は安心して生活できる (%)					
要因	評価	1	2	3	4	5	6
自分のよさや頑張りを認めてくれる先生がいる	1	1					
	2		1	1		1	1
	3				3	2	
	4	1	3	4	11	7	3
	5	87%		93%			
	6	1	1	2	8	7	10

⑥		学校は安心して生活できる (%)					
要因	評価	1	2	3	4	5	6
自分のよさや頑張りを認めてくれる先生がいる	1	2	1	1	1		
	2		1	1		1	1
	3	1	1	4	7	4	1
	4	2	4		16	11	4
	5	47%		83%			
	6	1			2	1	10

⑦		学校は安心して生活できる (%)					
要因	評価	1	2	3	4	5	6
安心して相談できる先生がいる	1	1		1	1		
	2		1	1			1
	3		1	1	5	2	
	4	1	2	3	12	7	4
	5	82%		89%			
	6	1	1	3	7	7	10

⑦		学校は安心して生活できる (%)					
要因	評価	1	2	3	4	5	6
安心して相談できる先生がいる	1	2	2	1	2	1	
	2	1	2	1	2	2	1
	3			6	11	6	2
	4	1	2		14	8	3
	5	29%		69%			
	6	1			1	2	11

その結果、要因②「クラス内に話ができる友人がいる」、要因③「クラスで自分のよさを発揮できる場面がある」は、安心できた肯定群と否定群とで要因の重要度と実感度に大差は見られなかった。一方、要因①「授業で自分の意見が言いやすい雰囲気」、要因④「学習での個別支援の機会がある」、要因⑤「日常的に声を掛けてくれる先生がいる」、要因⑥「自分のよさや頑張りを認めてくれる先生がいる」、要因⑦「安心して相談できる先生がいる」については、肯定群と否定群で要因の重要度はほぼ変わらないのに対し、実感度には大差が見られた。生徒の安心度を高めるためには、特に、肯定群の生徒と否定群の生徒との実感度に大差が見られた「クラス内の居場所」、「学習での個別支援」、「先生との関わり」に関する要因の実感度が高まるよう、具体的な取組を継続することが重要であると推察した。

イ 効果が見られた教員の取組

実践後、教員にそれぞれの取組がどの程度効果的だと思ったか、事後調査を実施した結果、教員は全ての取組に対し肯定的に回答し、効果的であると考えていることが分かった（表 10）。特に生徒が重視している「授業で意見が言いやすい雰囲気づくり」「日常的な生徒への肯定的な言葉掛け」は、教員も肯定群が 100%であった。

また、「チーム支援会議」についても、100%の教員が「チーム支援会議は生徒の支援に有効である」と回答した。その効果について教員は、「多角的な見立てをすることが可能になるから」「自分で効果があると思っていたことが、逆効果であることなど、これからの指導にもつながる」「生徒を理解する上で大切な時間となっており、自分にできそうなことは何かを考える貴重な機会となる」などと答えた。「チーム支援会議」を定着させるための運用面での課題や改善の余地はあるが、全ての教員が有効性を実感できた取組であった。

(3) アのとおり、生徒が安心して学校生活を送るために重要と考える要因の実現が実感できている生徒ほど安心感も高い傾向にあったことから、不登校の「未然防止」「早期発見」「早期対応」のためには、表 10 及びチーム支援の取組が生徒一人一人の実感につながるよう具体的・継続的に実践することが重要であるとする。

表 10 教員の「生徒が安心して学校生活を送るために効果的と考える取組」

No.	取組	評価					
		1	2	3	4	5	6
1	授業で生徒が自分の意見を言いやすい雰囲気づくり	0	0%	0	46	100%	36
2	クラスで生徒が自分の意見を言いやすい雰囲気づくり	0	18%	18	18	82%	27
3	学習で個別支援の機会の設定	0	18%	18	28	82%	27
4	クラスで生徒のよさを発揮できる場面設定	0	18%	18	37	82%	27
5	学校生活で生徒のよさを発揮できる場面設定	0	9%	9	37	91%	27
6	教員からの日常的な生徒への言葉掛け	0	0%	0	18	100%	55
7	教員からの生徒のよさや頑張りを認める言葉掛け	0	0%	0	18	100%	36
8	生徒の話を傾聴し、一緒に考える教育相談	0	9%	9	18	91%	55
9	「相談室だより」など困った時役立つ情報提供	0	18%	18	18	82%	27
10	毎朝の健康観察による生徒の変容把握	0	9%	9	64	91%	18

ウ 不登校の「未然防止」「早期発見・早期対応」に向けた実践事例

生徒の事前調査「安心して学校生活を送るために」における「学校生活」において、「あなたにとって学校は安心して生活できる場となっている」の回答が「1」かつ「学校に行きたくないと思ったことがある」の回答「6」の生徒のうち、担任と養護教諭が核となったチーム支援が効果的だったと思われる事例（生徒C）と、担任の日常の行動観察からチーム支援につながった事例（生徒D）を紹介する。

(7) チーム支援が効果的だったと思われる事例：（生徒C）

クラスの間関係や部活動で多くの不安を抱え、事前の調査で「行きたいと思える場所が一つもない」学校生活の安心度は「1」と回答した生徒Cは、入学当初から高校生活に馴染めず辛さを訴えていた。6月上旬に体調不良で保健室に来室したことや保護者からの電話連絡がきっかけとなり、養護教諭はSCとの教育相談につなげた。担任も保護者との面談を実施し、中学生時代や家庭での生徒Cの状況などを聴いた。7月に入ると、保健室登校や欠席が目立つようになり、教室にも数時間しか入れなくなった。その状態が9月も続いたため、担任はSCと面談し、生徒Cの状況を伝えるとともに、支援の協力を仰いだ。その後も、担任と養護教諭は生徒Cの話を傾聴し、学校生活を支え続けた。担任や養護教諭に話を丁寧に聴いてもらったり、励まされたり、SCからも頑張りを認められた生徒Cは、友人もでき、「教育相談だより」でSCの来校日が分かると、自ら予約を入れ教育相談を受けるなど、前向きに学校生活を送るようになった。

担任や養護教諭が核となった支援を続けた結果、生徒Cは事後調査で学校生活の安心度を「2」と回答した。「2」になった要因は、「相談できる先生ができた」「教育相談だよりなど、困った時に役立つ情報がある」と回答した。少しずつではあるが安心度を高めている生徒Cに対し、担任は安心度が更に高まるよう、丁寧な関わりを続けている。

(4) 日常の行動観察からチーム支援につながった事例：生徒D

事前調査で、「友人関係が煩わしく学校に行きたくない時がある」と回答した生徒Dは、「私の性格上、人と関わらずに生きる強さはない。大変だけどクラスの友

達と上手くやっていかなければならないことは分かっている。でも、辛い」と素直に話した。

1 学期後半、生徒Dのいつもと違う様子に気付いた担任は、生徒Dと面談し、生徒Dが抱えているクラスの友人関係の悩みや家族とのトラブルについて話を聴いた。2 学期が開始し、生徒Dが保健室を利用した際には、養護教諭がS Cを紹介し、S Cとの面談が実現した。面談後S Cは、「生徒Dは、素直さが魅力の生徒であり、非常に力のある生徒なので、一緒に本人を支えていきましょう」と養護教諭に伝えた。

S Cの話をもとに、担任は面談を継続した結果、生徒Dは「先生は私の態度を見て、「どうした!？」と言ってくれる」と嬉しそうに話した。「相談できる先生ができた」と確信をもって言える担任との関係性が、生徒Dの学校生活を支える要因となっていることがうかがえた。担任の観察から見取った生徒の表れに対する適切な働き掛けや、養護教諭などとの連携が生徒Dの学校生活を支えていた。現在も担任は、日常的な言葉掛けや朝の健康観察記録用紙を活用した生徒の観察を通して生徒Dを見守っている。

5 研究のまとめ

(1) 研究から見えてきたこと

ア 「全ての生徒が安心して学校生活を送ることができる学校」実現に必要なと考える要素は、生徒と教員とも共通しており、その要素実現が実感できている生徒は学校生活の安心度も高いことが分かった。

イ 生徒の学校の安心度を高める取組は個々様々であるが、教員の生徒を認める言葉掛けや傾聴による生徒との信頼関係づくりは、全ての生徒にとって必要な取組であることが分かった。

ウ 学年部の全職員でチーム支援会議を実施したことは、教員の「学年部で生徒を支える」という意識を高めるとともに、不登校の「未然防止」「早期発見・早期対応」に向けた支援効果も高めることが分かった。

(2) 今後の課題

ア 教員は、全ての生徒にとって「学校が安心して生活できる場」となるよう、生徒の心に届く取組を継続的に実施する。

イ 限られた時間の中で、継続したチーム支援会議開催が可能となるよう、学校の実情に合わせた開催方法を検討していく。

【参考文献】

- [1] “今後の不登校への対応の在り方について（報告）”. 文部科学省. 2003
- [2] “生徒指導リーフ「不登校の予防」Leaf. 14”. 国立教育政策研究所. 2014
- [3] “不登校児童生徒への支援に関する 最終報告”. 文部科学省. 2016
- [4] “平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査について”. 文部科学省. 2019
- [5] 落合孝弘. “不登校の「未然防止」「早期発見・早期対応」における学級担任の役割 - 学級担任が核となるチーム支援体制の構築 -”. 静岡県総合教育センター. 2018